３．ヘモグロビン値と CVD 死亡との関連：
一般成人を対象とした 25 年追跡研究（NIPPON DATA90）

研究協力者　川島　恵美（滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター　大学院生）
研究協力者　久松　隆史（岡山大学学術研究院医歯薬学域公衆衛生学分野　准教授）
研究分担者　門田　文　（滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター　准教授）
研究分担者　早川　岳人（立命館大学地域健康社会学研究センター　教授）
研究分担者　喜多　義邦（敦賀市立看護大学看護学部　教授）
研究協力者　原田亜希子（滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター　准教授）
研究協力者　岡見　雪子（群馬大学食健康科学教育研究センター　講師）
研究協力者　近藤　慶子（滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター　講師（学内））
研究分担者　岡村　智教（慶応義塾大学衛生学公衆衛生学　教授）
研究分担者　岡山　明　（生活習慣病予防研究センター　代表）
顧　問　　上島　弘嗣（滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター　特任教授）
研究代表者　三浦　克之（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　教授）

【背景】 ヘモグロビンの正常値からの乖離は心血管疾患（CVD）リスクの一因である可能性があるが、決定的なエビデンスは不足している。さらに、前臨床条件がヘモグロビン濃度に影響を及ぼす可能性もあるが、逆の因果関係に焦点を当てた研究は限られている。そこでわれわれは、逆因果を考慮してヘモグロビン濃度と CVD 死亡リスクとの関係を検討した。

【方法】日本人の一般人口を代表する前向きコホート（1990～2015 年）において、ベースライン時に臨床的 CVD を発症していない 7,217 人（平均年齢 52.3 歳、女性 4,219 人）を対象とした。参加者は、性特異的ヘモグロビン五分位群（Q1～Q5）に分類し、可能性のある交絡因子で調整した Cox 比例ハザードモデルを用いてデータを解析した。

【結果】25 年間の追跡期間中に、男性 272 人、女性 334 人が CVD により死亡した。Q3 を基準として、性別の五分位における CVD 死亡の調整ハザード比[95%信頼区間]は、Q1（1.40［1.08-1.82］）と Q5（1.49［1.14-1.96］）で有意に高く、逆因果を考慮するために追跡開始後 5 年以内の死亡を除外しても有意なままであった（それぞれ 1.35［1.02-1.79］と 1.45［1.09-1.94］）。トランスフェリン飽和度と CVD 死亡率との間にも同様の U 字型の関連がみられたが、最初の 5 年以内の死亡を除外すると、関連は Q1 でのみ有意であった。

【結論】ヘモグロビン濃度の低値と高値は CVD 死亡リスクの上昇と関連していた。

***Circ J.* 2024 Feb 20. doi: 10.1253/circj.CJ-23-0725.**